

## 佐藤 博先生追想

猪 貴 義

岡山実験動物研究会名誉会員

佐藤 博先生が1991年10月26日に、その生涯を終えてから早いもので、3年余の歳月が経過した。佐藤先生は筆者が岡山実験動物研究会を設立するにあたり、有益なご意見を寄せていただいた関係者の一人であり、機会をみて、先生のことについて一言ふれておきたかったが、遅きに失した感じがしないわけではない。この度、紙面をいただいたので、佐藤先生との思い出の一端を記すことにする。

佐藤 博先生は1923年、岡山県に生まれ、1947年、東北大学医学部を卒業、卒業後は吉田富三教授の病理学教室に入り、その後、薬理研究所において、吉田、石館両先生のもとで癌化学療法の研究に従事し、主に動物病理細胞学的方面を担当した。1957年より民間の癌研究のパイオニアである財団法人佐々木研究所に移り、同研究所の病理・臨床病理部長として同研究所、附属病院の運営にあたるとともに、癌の薬物療法、移植癌の研究に従事し、多くの研究成果をあげられた。また、癌細胞の収集、株の維持、配布に当たられるなど癌研究の発展に寄与された。先生は1988年に、同研究所を定年退職し、日本癌治療学会名誉会員となった。

先生と実験動物との関係は、先生の恩師である吉田富三先生の流れをくむものであり、吉田肉腫の移植、癌化学療法のスクリーニングの研究において、癌細胞の増殖に鋭敏、かつ、均一な反応を示す実験動物に関心があり、吉田肉腫の移植率が高いDONRYU系ラットの開発を始めとしてミニチュア・ピッグの肝癌への誘発、その他、癌研究における実験動物の重要性について指摘した研究や論説が多い。

佐藤 博先生と筆者との出会いは、1963年に筆者が東北大学農学部より、東京都小平市にあった農林省家畜衛生試験場へ転出する時、当時、医学部教授であった佐藤春郎先生（吉田富三先生門下、癌病理学者）に、離任のご挨拶にあがった際に、「東京の佐々木研究所に義弟の佐藤 博がいるので、是非、訪ねてほしい」とのことで、後日、研究所に博先生を訪ね、お目にかかったことに始まる。当時、先生は少壮気鋭の癌研究者で、相当の緊張感を覚えたが、

温かく迎え入れてくれ、癌細胞の染色体の数と核型の異常について説明を受けたことを覚えている。

その後、先生の温かな人柄と、会うたびに「一杯飲もうか」とさそってくれる好意に甘えて、佐々木研究所を訪ねるようになり、癌研究の最前線の話の何うことになった。特に興味を覚えたのは、「癌細胞は個人の正常細胞が突然変異して癌細胞に変化したものであり、個人に個性（遺伝的）があるように、個人から発生した癌細胞にも個性がある」という話であった。この話は新鮮であり、当時から、癌は遺伝子の突然変異によるものと考えていた筆者にとって興味深いものであった。先生のこのような考え方は、その後、「癌の生態学—癌には個性がある（講談社、1986）」としてまとめられ、多くの読者の関心をよびおこし、癌についての知識の啓蒙に役立っている。

また、先生は丸山ワクチンに対する数少ない擁護者の一人であり、聞いたことによると、癌細胞には個性があるので、すべての癌に効く抗癌剤はなく、癌細胞の個性にうまくあった抗癌剤がいた薬ということになる。丸山ワクチンは前臨床試験においてデータの不足があったと聞いているが、臨床例は充分にあり、なによりも副作用がないのだから、患者の希望を聞いてやるべきである。丸山ワクチンで効果のなかった人には、それは水と同じと笑うかもしれないが、その価値を知っているのは、効果のあった患者であり、その家族であるということであった。そして、病原性をたたく物理的療法や化学的療法だけでなく、宿主側の恒常性（ホメオスタシス）の回復と維持に役立つBRM（Biological Response Modifiers）療法の検討が重要であり、丸山ワクチンはBRM療法の一つであると語っておられた。

筆者は、東京での農林省家畜衛生試験場時代においても、岡山大学へ移ってから、機会をみて、佐藤先生を研究所に訪ね、いろいろな事について相談にのってもらった。特に岡山実験動物研究会を作る時には、実験動物側にある関係者だけでなく、動物実験の側にある研究者達も一堂に集まるような会にしてはどうかというアドバイスを受けている。



第34回日本実験動物学会総会(1987年)

右より 川俣 順一学会理事長、佐藤 博先生、大藤 眞学長、猪

岡山実験動物研究会が、他の地域の実験動物研究会と違い、医学・歯学・薬学・農学・工学・理学・教育学など広範な分野の関係者が集まる会としてスタートしたのも、佐藤先生の助言によるもので、1982年12月、岡山実験動物研究会が設立されたのを、ことのほか喜んでいただいた。そして、先生は10年分の会費を払って会員となられた。また、1987年に、岡山において開催された第34回日本実験動物学会総会の開催についても、いろいろとご配慮をいただき、シンポジウム「ライフサイエンスの展開と実験動物の開発」において小課題の「癌研究と実験動物の開発」の座長を担当していただき、この分野のまとめをしていただいた。そのほか、1987年、朝倉書店から刊行された「動物の成長と発育」には編著者として参加していただき、第15章の「加齢と老化」について執筆をいただくなど、先生とは専門分野が異なるのに、多くの助言や協力をいただくことができた。元東北大学医学部教授の佐藤春郎先生のお導きとは申せ、不思議なご縁であったことをつくづく感じている。先生は郷里岡山に対する思いが深く、そのことが、筆者や岡山実験動物研究会への一層のご支援につながったのかとも考えている。

佐藤 博先生が書かれた随筆のうちには、恩師吉田富三先生との師弟関係にふれたものが多い。先生が最後に書かれた「癌研究の思い出(癌治療, 12(1), 1~3, 1990)」に吉田先生との関係について記載されているので、その一部を引用させていただきたい。

第5回医師国家試験終了後、満員の臨床教室に行くより先に、病理を少し勉強してからと、親にも納得してもらい、吉田富三病理学教室員となった。教室員となって先ず何をすべきか、一向にテーマが下がってこない。思いきって聞きにいった。吉田先生は「先ず疑うことだな」とだけ、何を疑うのか解らない。再び聞きにいくと「教科書を疑えばよい」という。これには驚いた。それまで教科書は聖書の如く、疑うものでなく信ずる気持ちで見ていた。入局時先生にいただいた著書「癌の発生」も、私にとっては教科書であり、それも疑うのか、即ち先生自身をも疑うのかと聞き返したところ、即座に「そうだ」とのこと。そして、結局私には特別のテーマの話はなく、ただ「癌の研究」ということで、自分で探せということであった。癌の勉強というものについて、手をとって教えてもらった記憶はほとんどなく、先生の背中から、学問をする態度、物の考え方、その進め方など教わったと記されている。

この一文を読んで、筆者はこの師にして、この弟子ありという感じを深くもった。自分の教え子に対して、「先ずすべてを疑ってかかれ」と言い切れる教授は少ない。吉田先生は、始めから、佐藤先生を信頼し、つき放すことによって、研究者として自己完成への道を歩むように指導されたのではないかと深く感じた。

佐藤 博先生は、吉田先生のご遺志を受けつぎ、多くの人を愛し、また、多くの人からも愛され、その生涯を終えられた。先生のご冥福を祈るとともに敬意と感謝を捧げたい。